

リュウノヒゲのマット状苗生産における育苗条件							
<p>[要約] <u>グランドカバープランツ</u>であるリュウノヒゲのマット状苗生産では、トレイに断根シートを敷設し、pH5に調整したピートモス・パーライト・山砂の2:1:1配合用土を使用し、施肥N量0.7g/㎡を元肥施用することで、地下部の生育を促進することができる。</p>							
三重県農業技術センター・花植木センター・栽培担当					連絡先	0593-70-4977	
部会名	野菜・花き	専門	栽培	対象	緑化植物	分類	普及

[背景・ねらい]

代表的なカバープランツであるリュウノヒゲは、現在は主としてポット苗で生産されているが、流通適性、植栽時の利便さ、早期被覆による土壌保持等の向上を図ること、また雑草の発生防止対策を目的として、より大型のマット状苗にすることが利用現場から求められている。このため、マット状苗生産について、地上部の生育のみならず、それ以上に根のマット化促進を図るための最適栽培管理法の確立を図る。

[成果の内容・特徴]

1. マット状苗生産における用土は、山砂・腐葉土の等量配合、ピートモス・パーライト・山砂の2:1:1配合、調整ピート単用で地下部の生育がいずれも良好であるが、経済性、利用性(重量)を考慮すれば、ピートモス・パーライト・山砂の2:1:1配合が適当である(表1)。
2. 用土のpHは、地上部及び地下部の生育が良好となるpH5前後に調整を行う(図1)。
3. 容器とマット苗の剥離を容易にするため、マット育苗容器へのシート敷設をする。シート資材は支根発生促進効果も認められる断根シートが適当である(表2)。
4. 施肥量では、施肥N量0.7~1.3g/㎡で良好な生育を示す。肥料の種類別では、緩効性化成肥料で施肥N量1.3g/㎡(元肥と生育期の2回施用)が効果的であるが、省力化を考慮すれば被覆複合肥料180日タイプで施用N量0.7g/㎡(元肥)が適当である(表3)。

[成果の活用面・留意点]

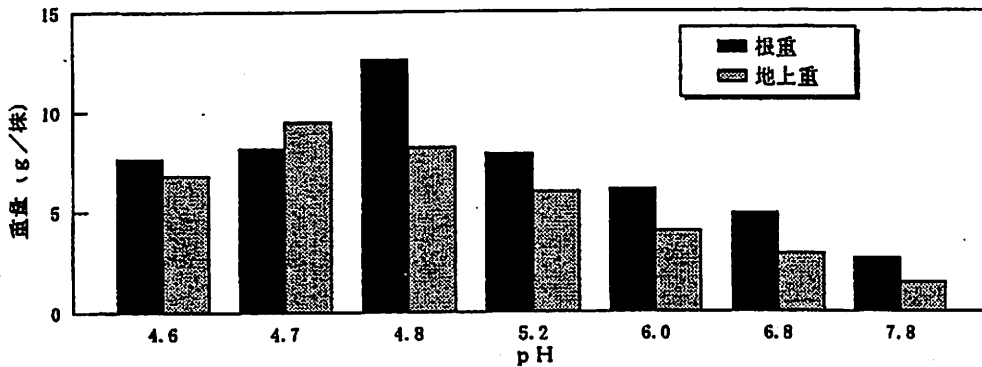
1. 地下部の生育を促進する最適な用土、断根シート資材、施肥管理法が判明した結果、生育期間の短縮が可能となり、施設の有効利用、省力化が図られる。
2. pH6以上で地上部及び地下部の生育が抑制される傾向であるため、留意が必要である。
3. 施肥管理については、外観の向上を目的とする地上部生育促進とマット状苗化のための地下部生育促進に対する最適施肥N量に差が認められるため、緑化苗として使用場面、目的を考慮した施肥管理を行う必要がある。

[具体的データ]

表1. 用土資材、配合の違いが生育に及ぼす影響 (平成8年11月)

No	供試資材	全体重量 g	地上部 生重量 g	根部 生重量 g	株当たり芽数 (分ヅ+ランナー)
	ピート:パーライト:山砂 モス 1:1				
1	1 : 1 : 1	5830	17.3	43.4	3.5(2.2+1.3)
2	1 : 1 : 2	6533	17.4	56.7	3.7(2.2+1.5)
3	2 : 1 : 1	5428	16.1	80.7	3.1(2.0+1.1)
4	0 : 0 : 1	9258	14.4	52.8	4.2(2.6+1.6)
5	1 : 1 : 0	3268	16.6	31.5	3.3(2.1+1.2)
6	調整ピート	3298	16.5	61.2	4.8(3.0+1.8)
7	ピートモス	2465	8.8	11.5	2.1(1.3+0.8)
8	山砂1:腐葉土1	6345	15.0	76.7	3.9(2.6+1.3)

定植月日 H7・9/15
 使用トレイ T1型
 (30cm×60cm×5cm)
 18芽植 (3条×6列)
 全体重量:T1トレイ容積
 重
 地上部生重量:T1トレイ
 の容積当り
 根部生重量:T1トレイの
 容積当り



定植時期
 H8・5/29
 15cmプラ鉢植え
 1株定植

図1. 用土のpHが生育に及ぼす影響 (平成8年11月)

表2. 断根資材の利用が生育に及ぼす影響 (株当たり) (平成8年11月)

NO	供試資材	地上部 生重量	根部 生重量	株当たり芽数 (分ヅ+ランナー)	マット指数 (本/mL)
1	スピンアウトシート	6.6 g	7.0 g	4.2(3.7+0.5)	0.41
2	ラブシート	5.3	6.5	3.8(2.8+1.0)	0.73
3	断根シート	7.8	8.7	4.8(3.4+1.3)	1.02
4	不織布シート	5.3	6.0	2.9(2.6+0.3)	0.27
5	農業用塩化ビニル	5.2	8.0	3.3(2.8+0.5)	0.32
6	シート無	5.9	6.8	4.2(2.8+1.4)	0.40
7	エアブルーニング	4.8	4.1	3.8(2.8+1.0)	0.76

定植月日 H8・5/29
 使用トレイ 育苗小型
 (27cm×35cm×7cm)
 18芽植 (3条×6列)
 用土ピート:パーライト:山砂
 等量混合
 マット指数:単位容積の根
 の本数
 1~6区までは、トレイ下
 に断根シートあり。

表3. 肥料の種類及び施用量が生育に及ぼす影響 (株当たり) (平成8年11月)

NO	供試資材	施用量 g/リットル	地上部 生重量	根部 生重量	株当たり芽数 (分ヅ+ランナー)
1	緩効性化成肥料(IFS1)	0.3+0.4	4.3	9.2	2.0(1.0+1.0)
2	緩効性化成肥料(IFS1)	0.6+0.7	4.5	9.3	1.8(1.0+0.8)
3	緩効性化成肥料(IFS1)	1.0+1.0	5.6	8.5	2.3(1.4+0.9)
4	被覆複合肥料180	0.7	4.1	10.0	1.9(1.0+0.9)
5	被覆複合肥料180	1.3	4.8	8.2	2.2(1.0+1.2)
6	被覆複合肥料180	2.0	5.7	7.8	2.1(1.1+1.0)
7	液肥OKF9	1.3	2.7	6.2	1.3(1.0+0.3)

定植月日 H8・5/29
 使用トレイ T1型
 (30cm×60cm×5cm)
 56芽植
 (2芽・条・列)
 用土(ピートモス1:パーライ
 ト1:山砂1)
 施用量=N成分

[その他]

研究課題名: 土壌中分解性トレイ利用によるマット状カバープランツ苗の育成
 予算区分: 県単
 研究期間: 平成8年度 (平成7~9年度)
 研究担当者: 内山達也 鎌田正行